

はじめに

日本語教師の毎日は忙しく過ぎていきます。スケジュールの内容を確認し、扱うべき項目を整理、分析し、それをどう伝え、そして伝えたものをどう運用に結ぶのか、それぞれで工夫し、考えながら教案を作り、必要な教材の準備までです。日によっては、2クラス、3クラスの準備をし、授業記録、試験の作成や採点、宿題、作文のチェックから、学生の進学や将来の相談まで受ける。一日中授業や学生のことを考えていることも珍しくなく、一週間、或いは一学期、一年はあつと言う間に過ぎていきます。

しかし、こうした忙しい毎日の中にも、ふと足が止まる瞬間があります。僕の場合、それは授業の中で起こることが多いのですが、学生たちを目の前にして「何かが違っている」という思いが生まれるのです。その日予定されている項目と目の前にいる学生たちとの間に大きな隔たりを感じ、お互いに楽しくなく、すぐそこにいるのに何も本当のことを伝え合っていないという思い。スケジュールに沿った教案の中に描かれているのは、教師の、教師のためのデザインであり、ひとりひとりの学生たちとそのことばが不在であることに気づくのです。そこで扱っているのは、彼らの、生きた、自由なことばではなく、死んだ、ことばの形でしかありません。これは、技術の向上や知識によってのみ改善されるものではなく、もっと根本的な問いが発せられ、しばらく僕は動けなくなります。「ことば」とは何か、その「ことば」を教えるとは、どのような所為なのか。足が止まるたびに、こうした疑問について考えようとしています。少しずつムリムリと、自分の授業の姿を探そうとします。毎日の忙しさの中で諦めつつも、「これでいいのか」と疑い続けるのです。

この僕たちのワークショップ《「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る》は、忙しさや思い込みの足を一度止め、「私」自身にとっての「ことば」或いは「ことばの教育」についてもう一度考える場を創ろうというところから出発しました。それぞれ抱えている思いを持ち寄り、協働しながら考えていこうというものです。こうした日本語教育観は、思考としてあるものではなく、実践の形が伴って、相互に作用しながら、立ち現われてきます。3回に亘るワークショップでは、教育観から実践をデザインしていく過程を参加日誌として記録していきました。ここに編集したものは、それぞれの参加者の参加日誌であり、教育観と実践、他者との相互作用の記録です。また、その中で起きた問いなおしや変容を通して、教師としてのアイデンティティが更新され、教師として成長していく記録でもあります。

まだ教育経験を持たない方も、自分は「ことば」や「ことばの教育」をどう捉えているのか、まずここから考えていくことが大切なのだと思います。その答えは常に過程であって、実践や他者との相互作用によって変わっていきます。しかし、それを考え続けていくことでしか、日本語教師を成長させるものはないのではないかと僕たちは考えています。

— 目次 —

活動概要

細川先生のお話の資料

実践記録

奥菌 克彦

武内 博子

平本 裕美

藤原 恵美

おわりに

活動概要

【ワークショップ開催日時】

第1回：2012年7月 7日（土）13:30～15:30

第2回：2012年7月14日（土）13:30～15:30

第3回：2012年7月21日（土）13:30～15:30

【活動概要】

月日	内容	課題
開始前	—	<p>【課題1】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜ日本語教師になったのか／日本語教師になりたいのか／日本語教師（日本語教育）に関心を持ったのかを振り返ったうえで、自分が実践している／実践したい「私の日本語教育」に名前をつける。 ・名前の由来を説明するためのキーワードを三つ挙げる。
7/7	<p>■「私の日本語教育観」を考える</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自、事前課題の「私の日本語教育」の名前、名前の由来を説明するための三つのキーワードを紙に書く 2) WSの概要説明 3) 細川英雄先生のお話・質疑応答 4) 1) で書いた内容を示しながら、全体で簡単に自己紹介 5) 「私の日本語教育観」を考える グループに分かれて以下について話し合い、問題意識を明らかにする <ul style="list-style-type: none"> ・なぜこのワークショップに来たのか ・「私の日本語教育」の名前、名前の由来を説明するための三つのキーワード ・なぜその教育観か 6) 全体共有 7) 次回予定、課題の提示 	<p>【課題2】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加日誌 ・「私にとって日本語教育とは」
7/14	<p>■「私の日本語教育観」から「私の実践」を考える</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 課題2を前回と同じグループ内で共有（確認・復習） 2) 課題2にもとづき、グループメンバーと協働で各自の「私の実践案」を考える 	<p>【課題3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加日誌 ・「私の実践案」をまとめる。
7/21	<p>◇「私の日本語教育観」を実践という形にする</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 課題3を前回と同じグループ内でシェアし、協働で教育観と実践案を往還させながらさらに「私の実践案」の内容を練る 2) 「私の実践案」を全体共有 	

細川先生のお話の資料

日本語教育実践ワークショップ

「私の日本語教育観」から 「私の実践」を創る

2012年7月7日(土) 早稲田大学22号館

細川英雄

早稲田大学大学院日本語教育研究科



<http://www.gsjal.jp/hosokawa/>

このワークショップで考えたいこと

- なぜあなたは日本語教育に興味を持ったのか、きっかけから実践イメージに至るまでの経緯を具体的に考えてみよう。

日本語教育への興味関心



実践イメージ

日本語教育への興味・関心から 実践イメージへ

- 日本語教育への興味・関心(⇒なぜ私は日本語教育に興味・関心があるのか?)
- 自分の教育観(教育に対する考え方)とは?
- 教育実践へのイメージづくり(こんな教師になりたい、こんな学習者を育てたいこんな教室をつくりたい、こんな関係を構築したい…)

自分の教育観(教育に対する考え方) とは?

- 自分の教育観の振り返り・意識化
- 教育観の奥にある**テーマ**の発見
- 興味・関心から湧き起こるテーマは、自分の過去・現在・未来を結ぶ(「わたしは何がしたい、どうなりたい、何ができる…」を展望すること)

どうすればテーマは発見できるか

- テーマは、自分と他者の間にある
(テーマは初めから自分の中にあるわけではない)
- 他者に広げる／私にとっての「なぜ」
⇒ テーマ発見
- テーマに沿って現実をデザイン(例:実践イメージとして)

ワークショップ「「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る」



ワークショップ「「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る」—その意味と課題

- もう一度、自分を問い直してみる試み
- 「なぜ」と考えることで見えてくるもの
- 自分の内側を他者に向けてひらく

- 自分のテーマを
生成・更新する時間



参考図書

- 牲川波都季・細川英雄『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望—』三省堂 2004
 - 細川英雄『研究計画書デザイン』東京図書 2006
 - 細川英雄『論文作成デザイン』東京図書 2008
 - 細川英雄・館岡洋子・小林ミナ『プロセスで学ぶレポート・ライティング—アイデアから完成まで—』朝倉書店2011
 - 蒲谷宏・細川英雄『日本語教育学序説』朝倉書店 2012
 - 細川英雄, 武一美(編・著)金龍男, 坂田麗子, 村上まさみ, 森元桂子(著)本杉琉(表紙・イラスト)『初級から始まる「活動型」クラス—ことばの学びは学習者がつくる』(スリーエーネットワーク、2012)
-

『初級から始まる「活動型」クラス—ことばの学びは学習者がつくる』(スリーエーネットワーク、2012)

- 早稲田大学日本語センター・金龍男(キム・ヨンナム)さんの前書き(日本語ライフ・ヒストリー)がすばらしいです。ぜひ一読をお勧めします。

- 「言語文化教育研究所」にて割引販売中。
 - ￥1200 → ￥1000+80円(送料)
 - メールマガジン「ルビュ言語文化教育」をご覧ください。<http://www.gbki.org/>
 - お問い合わせ：info@gbki.org
-

実践記録

日本語教育実践ワークショップ

「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る

奥園 克彦

7月7日ワークショップ

1 私の「日本語教育観」

教室活動によってなされるのが一般的な、また自分の持っていた教育観でしたが、日本語教育能力検定試験の勉強をしている過程でさまざまな日本語教育手法を学ぶにつれ、教室で教師が一方的に学習者へ知識を伝えるというイメージは変化していきました。日本語教育を異なる文化的背景を持った学習者とのやり取りを通して自分の言語観、日本語を見直す機会として考えると、私の「日本語教育」についての見方は、一言で言うと「自文化を相対化する実践」ということになります。

2 なぜ、日本語教師になりたいのか

私が、日本語教師になり、今後の人生においてそれを生業としていきたいと考えたきっかけは、2つあります。

一つ目は、ツイッターやスカイプで外国の人と会話する機会があり、日本語の挨拶、言葉を教える経験をしたこと。二つ目は、個人的な趣味で、文学、歴史や古典など日本文化について興味があること、さらには、漫画、アニメ、ゲーム等サブカルチャーが大好きなのですが、日本語を学ぶ外国の人々の中には、日本のサブカルチャーに興味がある人が少なからずいることを知り、サブカルチャーを含めた日本文化の多様性をもっと伝えたいと思ったことです。

一つ目については、「教える」というよりも、会話の中で自然に、日本語の表現を伝える、あるいは単語の意味、ニュアンスについて説明するといったほうがいいかもしれません。一般的に単語を教えて、文法は・・・といった意識なく、普通に会話の中で日本語を伝えるという行為になっているので、「教える」意識はほとんどありませんでした。そういったやりとりの中でも、会話するたびに、完全でないにせよ、相手が新しい表現を身に付けていく様子を実感し、ふと、これは日本語をいわゆる「教えている」ことになるのかと漠然と感じていました。考えてみると、自分の場合、語学の習得といえば、中学からの英語の授業、さらには大学での第二外国語と、いつも教室での授業が、語学勉強のイメージとしてありました。せいぜい、気まぐれに興味をもったラジオ講座による語学勉強が、自主的に取り組んだ勉強といえるかもしれません。そのような自分の経験をもとにすると、言語を使えるようになるために日々教室で、単語や文法暗記していたこと（もちろん、そ

ういった勉強を否定するつもりではなく) 以外に、より自然にストレスのない形で語学習得を目指せる可能性について意識するようになりました。

二つ目については、日本語教師という仕事を知り、本屋で手にした「日本語教育」に関する雑誌の中に、サブカルチャーに興味ある日本語学習者の記事があったことで、ますます日本語教師という仕事の魅力を感じるようになりました。日本文化を海外の人へ伝えることの面白さを感じることができると思ったからです。

日本語教師という職業については、学生のと時から漠然とは知っていたものの、それを目指すという考えは全くありませんでした。しかし、ツイッターやスカイプで相手の人と話していてすぐに感じたのですが、日本語を「教える」という行為は、母語として無意識に身についた言語を相対化することになります。たとえば、敬語の使い方は、日本人同士では、暗黙に相手と自分との関係を読み取り、尊敬語、謙譲語、丁寧語を選択しますが、立場を踏まえた話し方は、慣習、文化の知識がないと、単語の知識があっても誤用となるケースが出てきます。特に、外国の人と会話する場合、そういった単語のみならず、必然的に言葉の用法や背景知識、会話している状況を意識せざるを得ないというのは、生活で普通に行われるコミュニケーションの自明性を疑わせる、自分にとって新鮮な体験だったのです。

3 自分が実践したい「私の日本語教育」

名称：『「楽しみ」の共有』

自分は、まだ日本語教師として教室活動を経験したことがありません。しかし、日本語教師になりたいと思った理由が、異文化の人との会話であったこと、そういった会話を楽しんでいたことを考えると、今後、日本語教師としてどのように実践いくかについては、何より「楽しめる」ことを大事にしていきたいと考えます。それは「教える」側も「学ぶ」側も双方にとってという意味です。「教える側」にとっては、学習者の目標言語ある日本語、そして日本文化についての興味・関心、「学ぶ側」については、日本語を学ぶ動機、言語習得の結果得られるコミュニケーションという、双方の「楽しみ」を交流させる「場」の機能を、「日本語教育活動」の実践で持たせたいと考えます。日本語教育活動という「場」では、同じ文化的土壌を共有する安定したコミュニケーションではなく、お互い、自らの文化的土壌を揺るがすようなコミュニケーションが行われることになります。それはすなわち、日ごろは気づきにくい言語活動の多様性を認識する機会としての意義を見出すことができます。今後、日本語教師をやっていく上で、言語が文化的、社会的活動そのものであり、「学ぶ」側が、「主体的に」日本語を習得し、「教える」側と双方向で「楽しみ」を共有できる「日本語教育活動」の実践を、考えていきたいと思っております。

名前の由来を説明するためのキーワード

① 日本文化

言語活動が、語の使用、表現を表すものであるとすれば、それらは、必然的に社会活動であり、すなわち、日本語の言語活動ならば、日本社会、ひいては日本文化についての活動である。

② 交流

言語活動においては、語る主体と聴く主体が存在する。そして、その両者との間に、移動、つまりコミュニケーションを生起させる。とはいえ、それらのコミュニケーションは、固定的な2つの主体を前提にするのではなく、複数主体による相互交流のコミュニケーションである。

③ コミュニケーション

コミュニケーションの図式として、話す主体と聴く主体が共通のコードに基づいて意味を伝達しようという、安定した対照的コミュニケーションが前提にされる。しかし、日本語教育活動は、日本語を介して結びつける共通のコードがないところから始まる。つまり、共通のコードを前提にしないところから、お互いそれを探りながら、また見つけあいながら、コミュニケーションが図られる。

日本語教育活動を通じて、日本文化、日本社会における慣習、振る舞いについて意識的になること。共通のコードを持たない者同士が行うコミュニケーションによって、教える側にとっては自文化の見直しにつながり、一方で学ぶ側にとっては異文化を知るという、お互い、自分が属していた文化の相対化へつながる。

7月7日活動日誌

日本語教育のワークショップに参加するのは初めてだったので、とても緊張しました。しかし、日本語教育の経験がない自分にとっては、グループワークの方々のいろいろな体験談は、新鮮で参考になり、同時に、やはり日本語教師はやりがいがある仕事なんだなぁと改めて認識しました。実践経験のない分、自分のやってみたい日本語教育など、かなり抽象的になってしまっているので、今後の自分の実践のために、さらに経験者の方のお話を聞いてもうすこし具体的な日本語教育の実践を描くことができたらと思っています。

7月14日ワークショップ

自分の個人的な体験から、教師と学習者がお互い「楽しむ」教室活動を目指したい。その「楽しむ」とは何かについて、前回のペアワーク、グループワークで、共通して頂いた疑問。

①自分の興味に基づいて、それを「ネタ」として提供しながら教室活動を行うのは確かに教師にとって「楽しい」。

一方で、そういった興味を、教える側が提供するという形になると、学ぶ側で、興味を持ってない者が出てきた場合に、排除してしまうことになる。また、教室活動を、自分の持ちネタによって維持していこうとするのは、無理があるのではないか。また、教師の役割を「ネタ」提供者とすると、エンターテイナーとしての役割を担うということか。

②日本語教師は、日本語、日本文化に興味を持たなければならないのか。

③②に関連して「文化」とは何か。

①について

この疑問が生じた理由として、自分なりに考えてみると、日本語教師になりたいと思った動機、自分の興味分野の会話での体験を元にして「楽しめること」を「実践したい日本語教育」の項目で挙げたことで、教師の興味・関心を教室活動で「ネタ」として提供することが、自分の実践したい「楽しみ」の教室活動であるという受け取られ方をしたからではないか。そしてさらには、教師側の「楽しみ」と学ぶ側の「楽しみ」について、明確に記述していなかったことも疑問の生じた理由であったと思われる。

教える側の「楽しみ」というのは、日本語教師という職業が、日本語母語話者以外の人々に日本語習得の手助けをするという役割であるとする、日本語やそれに付随するさまざまな表現、日本人のものの見方に、改めて興味や関心を持つということであり、教室活動で「ネタ」提供することで「楽しみ」を見出すということではない。また、教師の役割として、エンターテイナーである必要はないと考える。なぜなら、学習者主体の実践が目指されるべきで、主役である必要はないからである。一方で、学習者の「楽しみ」については、教室活動で行われたタスク（ゲーム、調べる、または、文法練習でもなんでもよい）あるいは教室外であっても、コミュニケーションが取れたという充足感のようなものである。

したがって、「教える側」が提供するひとつの話題（「ネタ」）に向かって、ではなく、日本語教育活動をきっかけにして、それぞれお互いの「楽しみ」が得られるということ、それが自分の意図していた「楽しみの共有」ということになる。

②について

日本語や日本文化に興味を持つことが、日本語教師としての必要条件かどうかについては、言語や文化に興味があったほうが、より充実した教室活動へつながるのではないだろうか。

③について

言語が文化であるという私の記述には、飛躍があったかもしれない。そもそも言語を習得するというのは、他の人間と関係を取り結ぶということに他ならない。同時に、さまざまな規範を見につけることでもある。そういった規範が顕在化したもの、それが儀式や儀礼ということになる。また、言語習得の過程で社会生活に必要な身体技法さまざまなジェスチャーを身に着け理解していく。このような、儀礼、儀式、社会生活上の身体技法等、それらを一くくりにしたものを「文化」と呼ぶことができるのではないだろうか。さらに言うなら、ある共同体にはこれこれの習慣があり、別の共同体にはそういう習慣は見られないといった差異は厳然として存在する。そういった差異の総体を便宜上「文化」として考えることができるのではないだろうか。

7月14日の活動日誌

自分のレジュメについて、ペアワーク、グループワークでさまざまな疑問点を頂き、やはり、一人よがりになってしまったところもあり、新たに気づかされたことが多々ありました。「楽しみの共有」を実践するための具体的手法について、答えを出せてないというのが実感です。日本語教育活動における「楽しみ」とはいったい何なのか、そもそも設定すべき実践テーマだったのかについて、根本的にもう一度考え直す必要があるのではないかと考えております。

7月21日ワークショップ

活動日誌と全3回を通しての感想

今回のワークショップでは、出席者全体でのグループワークが行われ、それぞれが目指す日本語教育の実践イメージが話し合われた。私は、日本語教師を目指すに至った個人的

な体験から日本語教育活動における「楽しみの共有」というテーマを掲げたが、その実践イメージに乏しく、あいまいさがあることを痛感し、同時に、「楽しみ」というのが、実践テーマとして掲げるにふさわしいものだったのかという最初の一步から考え直す必要が出てきたように感じた。

しかしながら、他の参加者の方々の実践イメージをお聞きして、教師のネタ提供者かどうかという点で同じ問題を持っている方（藤原さん）もいらっしゃること、あるいは、実践の事例（平本さんのオノマトペ絵本作成）を知ったことは大きな収穫であった。また特に、実践イメージとして、「居場所（感）」というキーワードを挙げられていた方々が複数いたことについて関心を持った。「居場所（感）」を挙げられた方々には、単に効率的に、言語的な知識を取り入れるような日本語教育ではなく、むしろそれと反対に、「共に学ぶ」という視点を踏まえていたように思われる。

私がこのワークショップに参加した理由は主に二つある。まず、自分の日本語教師になりたいと思った動機をいったん言語化したかったこと、次に、自分の抱いていた日本語教育のイメージについて、自分以外の方々へ提示することによって、再構築するきっかけになればと考えたことである。一つ目の動機の言語化については、1回目のワークショップで提示することができた。しかし二つ目の自分が持っていた日本語教育観と実践イメージを提示する段階で、はじめにも書いたが、どうしてもその浅いものになってしまったため、具体的な実践イメージを描くことができなかった。

今回のワークショップに参加して、大きな収穫は、武藤さん、式部さんからそもそも文化とは何か、また教師としての役割といった根本的とも思える疑問点をいただいたこと、そして他の参加者の方々の体験、実践イメージを聞いたことである。それらは、日ごろ何気なく使っている言葉や何気なく抱いていたイメージについて大きく考え直す材料となった。今後は日本語教育活動における「文化」、「教師」とは何かという「問い」を持ちながら、今後の課題として、抽象的なイメージから、具体的な実践イメージを得られるようさまざまな実践活動を知ることが必要だと感じた。

日本語教育実践ワークショップ

「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る

武内 博子

■私の日本語教育観

「日本に住む外国籍の人々が、日本での生活に満足し自己肯定ができるようサポートできる、そして私らしく現場に向き合える日本語教育」

■キーワード：自己肯定（生きる満足感）、親子のつながり、私らしさが生かせる実践

日本語教師になる—それは、日本を出て働きたい、同時に、日本にいる外国籍の人々が少しでも日本語で困ることなく生活できるように、という思いからであった。この二つの理由は相反する。私は在日韓国人3世として日本に生まれ、日本語を母語とし生きてきた。祖父母が日本語を読み話せても、ひらがなしか書けなかったことは子供ながらに大変だと思った。そして、私が子供のころ、1980年代、90年代はまだまだ、国籍を隠して生きる社会であったように感じる。私自身が自分が外国籍であるというのを自覚したのは高校入学時に提出する外国人登録済証明書を学校に提出する時であった。思春期真っ盛り、アイデンティティ・クライシスに陥る。そして、日本人に対し外国籍であることを隠すように生きていた父、恥ずべきことは何もないとした母の間で、在日であることについて意見の食い違いもおき、家族関係も壊れた。外国籍の人が日本に住むのは、悪いことなのかという複雑な思いに陥る。それゆえ、日本を出て働きたい、逃げ出したい気持ちがあったのだと思う。今後の生活を考え、私は日本国籍を取得した。

日本国籍を取得後、行政上のスムーズな手続きなど、日本で生きる上で便利である。また当時は海外へ行く際、複雑な手続きだったためそれも解消された。

今回ワークショップで、私の目指すところは、言葉を介した「人」の教育なのだと実感した。日本語というのは媒介にすぎない。国内外の日本語学校で教師として働く中で、そして、これからしたいと思っている外国人児童生徒とその家族を対象とする支援を意識したとき、上記に上げたキーワードが出てきた。

一つ目のキーワード「自己肯定」について、私の意図するところは、国籍にかかわらず自分はここにいていいんだという居場所感である。国籍の存在を完全に無視することはできないと自分自身も思うが、何かしらの理由で、日本に生まれた、日本で生活している、日本語を勉強している、日本語で勉強している、その彼ら一人一人が、私は私、あなたはあなた、一人一人は違うという意識を持つことができたなら、いろんな人がいて、だから私も存在していい、と受け止められるのではないか。少なくとも、私が陥った状況、否定的なとらえ方にはならないはずだ。

自己と他者の異文化接触は、私たちは幼少期から行っていることであり、特別のことではないが、同じ国籍であるということ意識されにくいものでもある。私たちは家庭を出て学校へ行くときも、それぞれの家庭から来たクラスメートと「異文化」接触をして

いるのである。ここに言語がわからないという要素が加わると、国籍で人をわけてしまう事態が起こりやすいのではないか。例えば、「～さんは、日本人じゃないから…、日本語がまだ話せないから…」という分け方になってしまいやすいかと思われる。そのような状況であっても、その身を置く状況で、自分を表現できるなら、居場所感を持てるのではないだろうか。

では居場所感、自己肯定はどうやって生まれるのか。そこで上げたのが2つめのキーワード、「親子のつながり」である。私はこれから、日本で生活する外国籍の人々を対象とした日本語教育にかかわりたいと思っている。その際初めに浮かんだ対象者が外国人児童生徒であった。というのも、私自身日本語は母語であるものの、成人する過程で外国籍であることに悩みを抱いた時期があったからである。今回ワークショップでいろいろな方と話す機会に恵まれ、新たな気づきとなったのが、親子間の温度差である。子供は生活言語を初め、日本語がどんどん上手になる中、例えば日本語があまり上達しなかった親と話せないという事態が起こる。コミュニケーションがとれないことで子供が親を軽視する傾向になり、家庭に寄りつかなくなる現状があるようだ。子供の立場から考えてみたい。彼らの来日時期、滞在期間を踏まえ支援を行わなければならないと思われるが、言葉を介し一人ひとりが自分の意見を言えるために、母語であれ、日本語であれ、きちんと思考を表現できる言語が必要である。子供は一人格形成中であり、自分の思考を、例えば言葉を介し表現することで、人格を獲得していく。では子供の人格形成が行われる場所はどこか。身を置くすべての場所—学校はもちろん、社会の最小単位である家庭である。子供たちがきちんと話せる言語として日本語を習得するならば、彼らは母語を意識的に学ばないと、家庭において、自分の表現、意図するところが伝わらなくなり、親子間の会話が難しくなるだろう。自分の伝えたいことが伝わらない状態で、私たちはここにいていいのだ、という肯定的感情、安心感は得られないと考えられるからだ。母語と日本語のバランスをとることは、児童生徒が学校、家庭それぞれ居場所感を得られる＝日々楽しいと思える大切な要因であろう。そこに必ず満足度、ここにいてよかった、という自己肯定感があるはずだ。親の立場でも同じである。さまざまな事情で来日し、母語で自己表現できる能力を持っているものの、日本語になると言えなくなり、子供の日本語がどんどん上達したら、親子のコミュニケーションが取りにくくなる。そのような状態で日本で生活することが楽しい、自分自身の存在を肯定できるだろうか。一つ目のキーワードの自己肯定は、子供に限らず親にも必要なことである。いろいろな問題、葛藤がある中で、社会の基礎となる家庭でいろいろ話せることは、慣れない土地で暮らす基盤となりよりどころとなるものであろう。

この自己肯定感を生み出すには、親の視点、子の点から出る意見を双方が理解することが必要となってくるだろう。その方法としては例えば双方の意見を、通訳を通し話す機会を設けることなど考えられる。

三つ目のキーワード、「私らしさが生かせる授業実践」とは、このワークショップを申し込んだ直接の要因であったと考えている。私は困っている人を助けたいという理由もあって日本語教師を志したが、同時に、頑張る人を応援することも好きだった。今までは日本語学校や予備教育を中心に日本語教育にかかわってきた。しかし、いつからか、私の代わりなどいくらでもいるという思いが生じた。というのも、日本語学校や予備教育において教え方のプロは多々おり、日本語が上手になるために、効率的に合理的にどう教えるかということが先走り、「教育」に割く時間、すなわち、学習者一人一人はどのような目標を掲げ、今どのような状態にいるのかという、学習者に向き合う時間が少ないと感じたからだ。クラス授業では機械的な動きになり、時間を割きすぎると教師間で学習者への対応の差を広げないと言われる。ふと私は、この仕事を楽しいと思っているのか疑問になった。教師も一人ひとり違っていいはずなのに、学校の枠にはみ出さないよう、「教え方」の部分を優先している自分に気付いた。間違いがないように、教え漏れがないようにといった具合である。もちろんこれらも大切なことで、教え方を磨くのはどの対象者であれ一生の仕事である。しかし、私自身「教育」が希薄になっていったことで、教えることが楽しめない自分に気付いた。教え方、テクニックの部分は一生の努力であると思うが、私自身が歩んできた人生、学習者へ向き合おうという気持ち、応援したい気持ちが生きるような教育実践をしたい、一度リセットしようと思った時、思いは日本語教育を志したルーツに戻っていったのである。

今はまだ、実践を行っていないので、実践イメージも大きなもので具体的ではない。これからそのイメージを一つ一つ何かにつなげて実践し内省することで、より具体的になっていけばいいと考えている。

■実践イメージ

子供：学校での満足感

親：日本で生活する満足感

そのよりどころとなる家庭
親子のつながり



日本の生活いいな！
私はここにいてもいい！



ここをサポートしたい！

日本語教育実践ワークショップ

「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る

平本 裕美

1. 初回の実践したい「私の日本語教育」

参加型クラス活動（ワークショップ 異文化理解 表現力アップ）

2. なぜ日本語教師になったのか？（振り返り）

私は最初の就職先で、経験豊かな技術者、より自分に合う仕事を求めてきた転職者、大学卒業後も勉強を続けるパート社員、自作品を売り込みに来る同世代のデザイナーなど、多くの人たちに出会い刺激を受けました。そして自分も「プロ」の技術を身につけ、長く続けられる仕事をしたいと考えるようになったのです。その頃（20年以上前）「日本語スピーチコンテスト（NHK）」で「日本文化や日本語を勉強できる場をもっと提供して欲しい」という声を聞き、日本語教師なら自分も「授業を創る」プロになれるのではないかと考え、資格をとりました。

転職したものの、すぐに子育てに追われることになり、なかなか経験を積むことができませんでした。そのころ11年間暮らした大阪府豊中市（+宝塚市）は、市民参加型の活動が非常に活発な地域でした。しかも託児付き。私は様々な講座に参加しました。国際交流センターでは「異文化理解」、女性センターでは「男女共同参画社会」、娘のガールスカウトでは、ユニセフによる「地球市民」をテーマとするワークショップです。これら参加型の学習スタイルは、私が学校で受けてきた授業とは全く違うものでした。

さらに、PTA広報紙や子育て情報誌の編集に参加し、いろいろな人と対話する機会を得ました。チームで活動することにより、それまで気付かなかった自分の力が引き出されていくのを感じました。手がけたものが完成していく達成感。そしてそれを一緒に味わえる人たちがいるというのは心強いものでした。このような体験が私の教育観に大きな影響を与えたことを、今回のワークショップで再認識しました。

3. 実践のイメージ

私は最初、目指す授業を「参加型クラス活動」と表現しましたが、実は既に多くの先生が取り組んでいるものです。前回お話した藤原さんもいろいろな生教材を用意して工夫されているし、私が今いる学校でも積極的に活動を取り入れています。大卒者が多く、趣味として楽しみたい、将来のビジネスに役立つ日本語を身につけたいという希望が強いからです。そこで、インタビュー、プレゼンテーション、ディスカッション、クラス新聞作り、料理(番組風の)紹介、新商品(架空)のCM作りなどのいろいろな活動を取り入れています。選択科目の種類も豊富です。この学校で、学生たちが意欲的に参加し、座学では見られない様々な特技を発揮する姿を目の当たりにして、私も参加型の活動を常に意識するようになりました。それでも学生たちは、「もっと会話の授業を増やして欲しい」と言います。

学校では、文法や語彙などの授業を欠かすことはできませんが、学習者はそれ以上に、日本語で交流できるようになること、相手の考えが理解でき、日本語で自分の考えや気持ちを表現できることを望んでいます。そのような力を伸ばすためには、日々の授業でインプットした知識を、自分の言葉でアウトプットできる場が必要だと考えます。「クラス」だからこそできること、思いがけず話が弾み、今日はたくさん話したなあ、「参加」して楽しかったなと実感できるような「活動」を授業の中に取り入れたいと思っています。

そのような「参加型クラス活動」の方法の一つとして、私に関心を持っているのが「ワークショップ」型の活動です。今回もこの講座に参加して、皆さんの体験や考えをじっくり聴き、自分の考えを深める機会を得ました。ワークショップには次のような効果があると思います。

- ①身近に存在しているのに、今まで気がつかないでいた問題を、
作業をしたり意見を出し合ったりしながら自分たちで発見する。
- ②他の人の考えを聞き、自分とは違う価値観に気付く。
- ③学び合う過程で、仲間の力を借りて新しい自分の能力を引き出す。
- ④コミュニケーションを取らなければ進められない状況を設定することで、
聞く&話す力が伸びる。

そして私の学校では、次のようなワークショップを開いたことがあります。

(1)劇団俳優によるワークショップ

- ①自分のニックネームをジェスチャーで表す。そのジェスチャーを使って、4~5人のグループで与えられたキーワードをもとに寸劇を演じる。
- ②短いシナリオをいろいろな状況で話してみる。向かい合って→隣り合って→ちょっと横になって→歩きながら→途中ですれ違った友達に挨拶しながらなど。より自然な会話をめざす。

(2)絵本作家によるワークショップ

擬音語、擬態語（だけ）を使って、4コマ（起生転結）のストーリーを創る。もちろん絵も描く。

(3)新聞社の記者によるワークショップ

「桃太郎」鬼が島で行ったことを、桃太郎側、鬼側それぞれの立場で記事にまとめてみる。

など

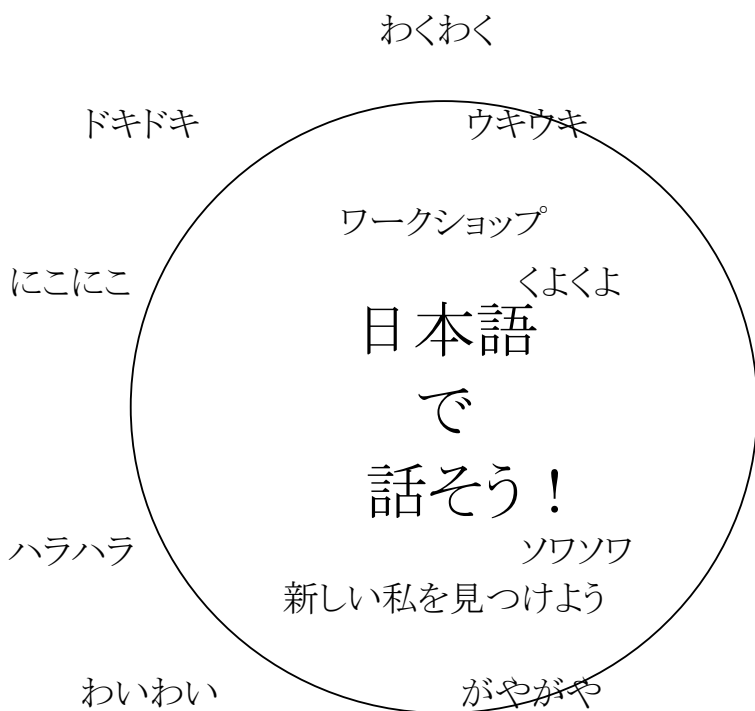
いずれのワークショップでも、学生たちは熱心に話し合い、短時間でとにかく作品を完成させました。初めは戸惑っていても、だんだんエンジンがかかってきて発表までたどり着きました。普段の授業では出せない力を発揮して、みんな生き生きしてきます。おまけに教師たちも参加者として、学生以上に張り切ってしまう。いつもと違う講師の指導が新鮮ということもあるかもしれませんが、新しい視点、授業のヒントは「日本語教材」の外にたくさんあるように感じました。

またこの活動は、外国人学生だけでなく、できれば日本人（教師以外）も参加した方が、生の日本語に触れるチャンスとしてはより望ましいです。日本語学校の学生は、教室と寮（+アルバイト先）

が中心で、「交流会などに参加してもその場限りで、なかなか親しい友人を作ることは難しい」「日本人と話すチャンスが思ったより少ないという声をよく耳にするからです。前回この話をしたとき、武内さんから外国人学生と日本人と一緒に参加できるような場の提供を考えてみては、とアイデアをもらいました。

教室の中ではなく、実社会で人と交流し、自分の気持ちや意見を表現できる力をつけるために、ワークショップという方法を活用していきたいと考えています。でも、私は参加者という立場しか経験がないため、これを日本語の学習にどのように（計画的に、継続的に）生かしていったらいいのか、結局、実践のイメージまでたどり着いていません。できれば今後、一緒に活動できる仲間を見つけ、その方法を探していきたいと考えています。

4. 最後に書いたポスター



日本語教育実践ワークショップ

「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る

藤原 恵美

「ワークショップを終えて」

「飛び出せ教科書」というのが、私の最初に決めた実践名だった。普段日本語教師として、決まったカリキュラムの中で教科書を使って授業をすることが多く、自分は学習者主体の授業をしているのだろうかという疑問を感じていた。活動型の授業を行っていても、最終目的は教科書にある文型定着にあり、教師主導の展開になっているのではないだろうか。つまり、教科書を使って日本語を学習しているのではなく、日本語を使って教科書を教えているのではないか、そのため学習者が求めている実生活で使える日本語学習につながっていないのではないだろうかという不安をいつも感じていた。しかし、ワークショップを終えて気がついたことは、教科書中心の授業に問題があるのではなく、私自身が「教える」ことにとらわれていて、学習者中心の授業をしていなかったのではないかとということだった。

ワークショップに参加してメンバーと話し合う中で私が強く感じたことは、教師とは「教える人」ではなく、「学習者が楽しく学べるきっかけを一緒に作り、学習者をサポートする人」ではないかということである。普段教師は学習できる場を提供し、学習者はその中で自分が求める日本語を身につけていく。しかし、私が考える教師とは、場の提供だけでなく、将来学習者が一人で学習できるよう「きっかけ」を与えることではないだろうか。教師は教室で学習者と一緒に活動するが、学習者自身が教室を出て生活コミュニティの中で日本語を使うからこそ、話す力がつくと思う。

また、教室から出た学習者は自分たちの身につけた方法で日本語を学習する。しかし、すべての学習者がそのやり方を知っているわけではない。また、その学びの「きっかけ」さえつかめない学習者もいるだろう。そのために教師は彼らが自分で学ぶための「きっかけ」を提供すること、そして自分たちで学び始めた時それをサポートすることではと考えた。私の所属している日本語学校の学生の中には、日本語を話すのは学校だけで、学校を出るとアルバイトと家しか行くところがないという学生がいる。彼らは学校の外で日本人の友達を作ったり、日本語を話す機会がないと言う。彼らは教室では友達や教師と一緒に勉強しているが、自分一人で勉強する方法を知らないのではないだろうか。私たち教師は教科書を教えるのではなく、彼らが自分で勉強する方法を教える方が大切で、そのための「きっかけ」を提示することが必要だと思う。

この「きっかけ」とはどういうことかということ、学習者の興味・関心がある学習材料を提示し、それを使って日本語を学ぶことができる状況を作るということである。しかし、これは教師が一方的に提示するのではなく、学習者と一緒に考えるということでもある。ワークショップでは、この学習材料を「ネタ」と表現するときもあったが、「ネタ」というと教師の意向が強く働いてしまう気がする。誰しも自分の興味・関心があることに対して

話したい、聞きたいという気持ちが働く。その気持ちを日本語で表現することで、学習者はさらに勉強したいという気持ちになる。すると、教室を出た後でも、彼らは自分たちで勉強する機会を探すようになる。そうすることで、学習者は自律学習のストラテジーを身につけることができるようになるのではないだろうか。以前私が教えた学生に歌が大好きな学生がいた。彼女は日本語が覚えられないと悩んでいた。そこで、最近流行ってる歌を紹介し、歌詞を読み、一緒に歌を歌った。すると、彼女は歌っているうちに歌詞を覚え、その歌詞の日本語に興味を持つようになり、自分で辞書を使って調べるようになった。普段の会話で言葉が増え、歌詞の中で使われている文法についても質問してくるようになった。そのうち自分でいろいろな歌を調べて歌えるようになると、一緒にカラオケに行く日本人の友達も増え、どんどん日本語が上手になっていった。これは、教科書では得られなかった学びの姿勢を、教室での「きっかけ」から自分のやり方で身につけていった一つの例だと思う。

クラス活動の中では、教師は学習者の様子に常にアンテナを張り、学習者と一緒に勉強していく中で「きっかけ」となる学習材料を見つけてくることが必要だと思う。その手段として、活動型授業がとてもいいと思う。教科書も一つの「きっかけ」になると思うが、自分から発信し、相手の考えを理解する活動に比べると、やはり弱い気がする。活動型であれば、クラス内の話し合いの中自分の考えを表現することで自分について見つめなおす機会ができるし、友達と活動を共有することで興味・関心が広がると思う。活動型授業では、さまざまなタスクが使われる。ワークショップの中で私はタスク集を作りたいとは発表したけど、これはこの活動型授業をするために学習者の興味に応じたタスクの引き出しをたくさん持っていたと思ったからである。今後そういった関係の本や実践報告などを研究していきたい。

ワークショップでの話し合いの中で、「クラス全員が興味・関心を持つ学習材料を見つけるのは難しいのではないか」という質問があったが、クラスの中でその学習材料に興味がない人がいても、他の学習者の様子や話を聞くことで興味・関心を持つようになることもあると思う。それが意識を変える「きっかけ」となることもあるのではないだろうか。もちろんその時話に出たけど、ここで大切なのが、クラスが楽しいと感じる場所であるかどうかであり、教師はそういった場所を作ることも必要だろう。

この3回のワークショップに参加したことで、私は自分の教育観・実践イメージを文章化する機会に恵まれた。まだ漠然としたものであるが、実践イメージの方向性が少し見えてきたと感じている。

おわりに

おわりに

まずおわびから。

ワークショップ参加者の皆様には、秋の始まる頃このレポート集をホームページにアップすると申し上げたのに 11 月になってしまいました。遅くなりましたことをお詫び申し上げます。

ワークショップから 3 か月が過ぎました。皆さま今はどんな現場でどんな実践をされているでしょうか。ワークショップは何らかのかたちで皆様のそれからの実践に響くものがあったでしょうか。

本ワークショップは私たち 3 人にとっても新しい試みでした。参加者ひとりひとりの教育観を互いに拓きあい、協働的に実践像を思い描いていこうというものです。そこでの実践像はいわば理想の、これからの実践像です。だから、現在現場で行われている実践とは異なるものかもしれない、でも、そうだとしたらどうすれば現場の実践を理念に近づけていけるのだろうか、そんなことまで話し合われたと思います。

このワークショップが参加者の皆さまにどのような意味があったのか、それは本編を読んでもいただければ理解いただけるとは思いますが、何より意味を感じていたのは、企画者 3 人だったかもしれません。教育の理念とは何か、実践とは何か、理念と実践をどのように結びつけていくことが可能だろうか、私たちが投げた問いではありましたが、参加者の方々に受けとめられ豊かにされ、私たちも共有することができました。

その問いを私たちは 12 月のワークショップであらためて拓いていきたいと思っています。教育の理念と実践についてゆっくりと語り合ってみたいと考えている方々、ぜひ 12 月 8 日（土）から始まる公開講座にもご参加ください。もちろんリピーター大歓迎です。

お待ちしております。

日本語教育実践ワークショップ
「私の日本語教育観」から「私の実践」を創る

■ 発行日:2013年1月8日

■ 発行:早稲田大学日本語教育研究科
〒160-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14
TEL:03-3204-9242

■ 編集:2012年度日本語教育実践ワークショップ
「『私の日本語教育観』から『私の実践』を創る」メンバー

■ 発行兼編集責任者:細川英雄・佐藤正則・高橋聡・古賀和恵

■ 本実践集の全部または一部を無断で複製・複写することを禁じます